

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



とも やす  
齊藤 智保さん  
昭和13年9月5日生まれ。  
木野地区在住

## 私の生まれと

### 子どもの頃の記憶

**私** は昭和13年、青森県五所川原市で三反五畝の水田を耕作する分家に生まれました。

昭和20年、家族5人を残して、父は巡査として青森市へ単身赴任していました。戦争が激しくなる中で空爆を受け、防空壕で恐怖に身を震わせていた時、山を隔てた青森市近郊に焼夷弾が炸裂し、夜空が赤く染まっていった様子はまぶたに焼き付いています。父は倉庫から流出した大量の油にまみれ負傷者の救助に奔走したことで、重い「脚気」(ビタミン欠乏症の1つ)を患い、完治まで長い時間を要したと記憶しています。

## 戦後の暮らしと

### 母への感謝

## 終

戦を迎え、再び家族6人の生活が始まりました。母は農家から譲り受けた野菜や卵をリヤカーで売り、生活を支えていました。子どもながらに家計を助けようと、小川に仕掛けた竹筒に入ったドジョウを売り、小遣いを稼ぎました。いつも明るく気丈に私たちを育ててくれた母への感謝の思いは忘れません。

中学校を卒業後、地元の農林高校に進学するも、学業内容に馴染めず昭和30年3月に退学。小・中学校の友の誘いで、同年4月に山口水道へ見習工として就職しました。頼りにしていた友は20歳の時に自衛隊に転職しました。

## 友からのハガキが

### きっかけで帯広へ

## 昭

和36年8月初め、「八戸から帯広へ転勤したので顔を見せてほしい」と久しぶりに友から連絡があり、一目会いたいと思い、帯広駅に降り立ちました。駅から真つ

直ぐ北へ続く道(現在の西2条通り)、かじのビルや十勝バス待合所などの街並みは、今も鮮明によみがえります。すぐに五所川原へ戻る予定でしたが、友が事故を起こし金銭的に苦労していると知り、少しでも力になりたい一心で帯広に残ることを決心しました。

## 就職・結婚と

### 厳しい気象条件

## そ

れから、配管工の経験を生かし、現在の森設備工業へ入社しました。翌37年には、会社の土工頭から紹介されたユキ子と結婚、2人の息子に恵まれました。

当時は厳寒期になると、近くの神社の立木が凍裂する音で目覚めることもありました。湿り雪の多い津軽地方では水道管の埋設深は30cmに対し、十勝では1m50cmでも凍結による事故が続出し、厳しい寒さには驚かされました。

## 独立して起業

## 昭

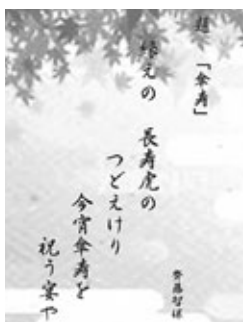
和41年1月、木野の鈴蘭橋近くに家を借り、裸一貫で独立。まだ水道設備

がなく、ポンプでの生活でした。人を雇う余裕はなかった。子どもを寝かせてから妻と2人、深夜まで働きまわした。いろいろ苦労もあつたけれど、自分が給排水を担当した柳町公営住宅第1号の完成は、大きな喜びでした。

## 傘寿を迎えて

## 七

転八起の精神で、故郷よりも長くなった十勝・音更での人生。周囲の人材にも恵まれ、厄払いの縁で始まった昭和13年寅年生まれ(とさん)の十三寅会の仲間と一緒に、傘寿を迎えることができました。70歳を過ぎた頃からは、短歌や俳句などの趣味に没頭しています。これからも気張らず、燃え尽きるまでマイペースに詠んでいきたいです。



▲齊藤さんが詠んだ短歌